

# 上州草津温泉の文化景観の変貌

佐々木 博

- |                 |                        |
|-----------------|------------------------|
| I はじめ           | 1. 宿泊施設・土産物            |
| II 温泉地草津の形成     | 2. 共同浴場                |
| 1. 草津町          | 3. スキー場                |
| 2. 温泉のおいたち      | 4. 草津国際音楽祭             |
| 3. 明治以降の発達      | 5. リゾートマンション           |
| 4. 高度経済成長期      | 6. イベント                |
| 5. 高原の開発        | 7. 町当局の景観形成            |
| III 多角的リゾート地の形成 | IV おわり——社会構造と文化景観変貌の要因 |

キーワード：ベルツ博士，リゾートマンション，共同浴場，草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバル

## I はじめ

群馬県吾妻郡草津町の中心にある草津温泉バスターミナルの前に、石の台座の上にステンレスでできた3体の等身大の彫刻が立ち、一人はバイオリンを、一人はスキーのストックを、一人は湯もみの板を持っている（巻末写真2）。これは草津町の三つの産業基盤を象徴している。

本報文は、草津の高度経済成長期以降の文化景観の変貌を明らかにし、その要因を探ろうとするものである。

1985年の比較文化学類，1991・92・94・95年の地域研究科の，5回もの野外調査を草津で行ないながら，まとまった成果は，まだなかった。さらに1989年9月はハイデルベルク大学モイスブルガー教授一行，1995年は国際地理学連合，「持続的農村システムに関する筑波国際会議」の一環として，全世界からの地理学者らと，草津の大学セミナーハウスでゼミナールの後，日本の湯の町情緒と温泉を楽しんでもらった。草津町へのお礼の意味も込めて，作成した。

## II 温泉地草津の形成

### 1. 草津町

「草津よいとこ一度はおいで（ハドッコイショ） お湯の中にも（コリヤ）花が咲くヨ チョイナ チョイナ」の草津節で知られる草津町は，長野県高山村と接する白根山（2138m）と西側の<sup>つまこい</sup>嬌恋村と境する本白根山（2165m）の東側にある。町の中心部は白根火山東麓，海拔1100～1200mの盆地にあり，盆地底からは湯畑・西ノ河原など無数の温泉が湧出し，湯川となって東流している（写真1）。町域は東西9km，南北8km，面積49.9km<sup>2</sup>（1994）である。その77.9%（3,887ha）は国有林を主と

する山林、11.2% (561ha) は原野、田は無く、畑がわずか3.8% (191ha)、宅地が4.5% (223ha)、その他2.6% (130ha) と、山林の町である。

年平均気温は8.0℃、最暖月7月は19.7℃、最寒月1月は-4.0℃、年降水量は1332mmで、避暑地としては軽井沢よりも優れ、とくに7・8月は湿度が70%台である点が優れている。白根山には火口湖の湯釜など多くの湖や茅平のような湿地、火山斜面には石楠花群生林やコマクサなどの高山植物があつて、観光資源にはことかかない。

無数にある源泉からは毎分36,839ℓの湯が49~95℃で自噴し、自噴泉としては日本一、湧出量でも別府(8.1万ℓ)に次いで全国第2位である。大きな源泉としては西の河原1,400ℓ/分、湯畑4,437ℓ、万代鉦(1974年給湯開始、市街西方1450mの96℃の源泉から自然流下で、主に台地上の新開地に給湯している)6,200ℓ、白旗1,508ℓなどである。草津の湯は高温で酸性が強く、硫黄分を含むため、5寸釘が5日で半分以下、10日目で針金のようになる。PHは2.08のため、湯川へは下流域の灌漑水・発電施設・河川工作物の酸害除去のため、市街東部に建設省中和工場が1963年より、石灰石を砕いて湯川に投入している。

草津は東京駅北西150kmに位置し、上野駅から新特急草津で2時間26分、長野原からバスで25分、計約3時間の乗車である。人口は8,294(1995)、1920年第1回国勢調査時の2,720に比べると3.0倍となっており、全日本の人口が5,596万から1億2557万へ2.2倍増したの比べると、75年間の人口増は急であった。人口のピークは1980年の9,341人で、以後漸減傾向にある。人口密度は166人/km<sup>2</sup>と全日本の337人の約半分に過ぎない。性比(女性100)は91で日本全体の96.3に比べて、男性が少ない町である。1世帯平均構成員2.3人は全国の2.8人よりは小さく、単独世帯や母子世帯が多いことを暗示している。

産業別就業者割合(1990)では、第1次産業1.2%(全国5.8%)、第2次産業11.7%(33.4%)、第3次産業87.1%(60.3%)と著しく第3次産業に偏った、典型的な観光地の例である。第3次産業率87.1%のうち59.4%(3,053人)はサービス業である。1960年当時は夜間人口より昼間人口が少なく、毎日227人の流出に対して152人の流入であった。1965年以降は昼間人口の方が多くなり、80年には310人の流出に対して、1050人の流入であり、職場としての草津が周辺の長野原町・六合村・嬭恋村・吾妻町・中条町などから通勤人口を引きつけている。流出の多くは、町内に高校がないため、長野原高校・中之条高校などへの通学者である。

## 2. 温泉のおいたち

草津温泉以外にもあるような、日本武尊東征の帰途とか、大和国菅原寺の僧行基がとか、源頼朝が巻狩の折に草津温泉を発見したとの言い伝えがある。地名の草津は、硫化水素の含まれた強酸性の臭水(くそうず)が転化したものといわれている。

草津温泉が記録に現われるのは、応仁の乱の最中の文明4年(1472)、本願寺蓮如の湯治記事であるとされている。連歌師宗祇は病氣治療のため文龜2年(1502)草津を訪れている。戦国時代は沼田城主真田信幸の持領となり、江戸時代には天領となり、来浴者は1万人を数え、「草津千軒江戸構え」

といわれた。7代目市川団十郎など多くの文人墨客も来浴し、8代将軍吉宗は湯畑の湯を樽詰として江戸へ運ばせたという。

草津の湯は強酸性で殺菌力強く、皮膚病・癩病・性病・脚気などに効くので、これらの人々が集まってきた。1817年（文化14）の諸国温泉功能鑑によると、東之方大関に草津の湯、関脇は那須、小結は湯河原、前頭筆頭は足の湯（芦の湯）であった。ちなみに西之方は大関に有馬、関脇城崎、小結道後、前頭筆頭山中であった。

明治維新とともに岩鼻県、1871年（明治4）群馬県、1873年（明治6）熊谷県、1876年（明治9）再度群馬県となった。そもそも明治期以前から、小雨村・前口村は、草津村兼帯と称し、草津村役場で所管していたが、1979年（明治12）2月小雨村（現在六合村CBDのある集落）を分離した。1899年（明治22）4月町村制実施の際、草津・前口・小雨・生須・太子・赤岩・日影・入山の8カ村を合併して草津村とした。その後1900年7月1日、六合村が草津より分離独立し、草津と前口とで草津町として今日に至っている。

1908年（明治41）、渋川——草津間乗合馬車が開通。1911年、草津——渋川間に自動車が行き通じられ、さらに1926年9月18日、草津電鉄が草津——軽井沢間55.5km全通するまでは、草津来訪は駕籠・馬を乗り継ぐか、徒歩で来なければならなかった。宿も自炊の湯治生活で40日にも及ぶことがあった。宿で七輪・鍋・釜・膳・夜着・布団などを貸し、その損料を宿泊料とともに徴収した。食料品・燃料なども宿で購入できた。湯治客は1日4回、数週間入湯し、数日間経つと股間・腋下・臍部などにただれを生じ、それが過ぎると病状が回復するといわれた。共同浴場での入浴のほかは、散歩・茶屋・揚弓場（江戸時代に遊戯に使われた、座ったままで射る小弓）・貸本屋・道具屋・床屋などで時間を過した。草津での強酸性高温湯での荒治療の後、ただれを治すために、川原湯（現長野原町）や沢渡（中条町）へ立寄り、あがり湯〔直し湯・仕上湯〕を浴びた。草津温泉は旧暦4月8日から10月8日までの夏季のみ稼働し、冬季は宿の管理人は「冬住み」と称して南の前口や、六合村小雨・赤石・沼尾などの農業集落へ下山した。薬師如来の縁日にあたる4月8日、光泉寺薬師堂で湯開きが行われ、10月8日の縁日で湯じまいをして本村へ下った。

しかし、明治初年には冬季間でも数十人が草津に残って、氷豆腐、氷餅、ろくろ細工などを作り、定住者が増え、冬住みは1897年（明治30）には終った。

### 3. 明治期以降の発達

草津は明治期に3度の大火を経験し、それによって町の中核メンバーの変更があった。1869年（明治2）4月7日、明日から冬住みが空けて営業開始という日の未明出火し、一夜にして全村を焼失した。岩鼻県権知事は民部省に宛てて、緊急援助を申し入れた。当時村高50石、家数167軒、人数714人であり、有力者は山本十一郎を筆頭に、湯本安兵衛・湯本平兵衛・中沢善平・湯本角右衛門・宮崎文右衛門・坂上治右衛門・坂上七兵衛などであった。江戸時代を通じて山本十右衛門（明治初年の改名で山本十一郎）と湯本三家が草津村を支配していた。湯本柳三郎（旧名湯本安兵衛、現日新館）は江戸時代からの有力大屋のうち、現在まで続いている唯一のものであるが、これ以外は大災を契機に借

金により経営者交代をせざるをえなくなった。代って市川善三郎（一井）・黒岩忠四郎（望雲館）・中沢市郎次（大阪屋）・山本与平次（大東館）などが新興勢力として勃興し、草津軽便鉄道株式会社創業（1926年完成）にも参画し、今日に引き継がれ、町長をタライ回しにしているといわれるほどの既成勢力となっている。これが草津地域主義となって西武など外来資本の侵入を阻止している（図1）。

1869年の大火以来、冬季でも温泉街に住む人が増え、1897年頃には、冬住みは一部の旅館を残すだけとなった。さらに、1903年12月、仲町・泉水が大火に見舞われ、草津の旅館主の巨人山本十一郎は壊滅し、1908年5月、仲町・立町32戸が焼失した。

### ベルツと時間湯

東京医学校（現東京大学医学部）の内科教授として来日したErwin BÄLZの草津にはたした役割は大きい。ベルツの碑・ベルツ通・ベルツの里・ホテル＝ベルツのほか、ロマンティッシェ シュトラッセ、草津温泉バスターミナル、湯畑を取り囲む土産物屋など、ドイツ風の建物が多く、伝統的な旅館と調和している。ベルツは1849年バーデン＝ヴュルテンベルク州の州都シュトゥットガルト都心北20kmの小さな町Bietigheim〔今日は合併してBietigheim-Bissingen〕で生れ、66年にチュービンゲン大学医学部に入学。69年ライプチヒ大学に転じ、72年に医師試験に合格した。76年ライプチヒ大学私講師となり、その年（明治9）、27才の若さで東京医学校へ生理学兼内科医学正教授として着任した。任期2年、俸給16,200マルク、ただし月割で金貨で支払う。以後26年間日本にいて、本業のほか、



図1 明治初年の湯畑周辺の土地所有  
(伊藤ていじ原図, 草津温泉誌 第2巻)

『日本鉱泉論』など多くの著述で日本を外国に紹介した。息子トク＝ベルツが父の日記を整理・編集した『ERWIN BÄLZ, Das Leben eines deutschen Arztes im erwachenden Japan』(1931, シュトゥットガルト)は『ベルツの日記』として岩波文庫から出版された。

1878年(明治11)ベルツが初めて草津へ来て以来何度も訪ずれ、土地まで購入し、1904年(明治37)最後に訪ずれた時、「草津には無比の温泉以外に、日本で最上の山の空気と、全く理想的な飲料水とがある。こんな素晴らしい土地がもしヨーロッパにあったとしたら、恐らくカールスバート(現チェコ北西部のカールロビバーリー)よりも賑うことであろう。この温泉の効力が知れわたったならば、あらゆる国の人々がやってくることは確実である。」とベルツの日記の中で述べている。ベルツは1905年、日本人女性花とドイツに去り、1913年(大正2)8月31日、Bietigheimで65才でその生涯を閉じた。草津町は1935年西ノ河原公園南斜面に「ベルツ博士顕彰碑」を建て、1961年ベルツの生地 Bietigheim と姉妹都市となった(写真8)。

「時間湯」は草津で幕末に湯治客の中から考え出されたもので、この浴法はのちに那須温泉でも行われている。時間湯を最初に記したのは国文学者堀秀成で、1865年(慶応元)『草津繁昌記』の中で次のように記している。

「入る人を見るに、手拭口にくはへなどして息もしあえぬ計りなり。か弱きは、此にて絶え果つる、年毎におほかりしとぞ、この湯に入る人の肌は、彼のいなばの白兔のやうに見えなり」ベルツはこの入浴法を外国に紹介し、近年また温泉医学が盛んになるにつれて再び脚光をあび、復活が望まれている。江戸・明治・大正・昭和と草津温泉治療の中核を占め、現在は「千代の湯」・「地蔵の湯」の二ヶ所で行なわれている。1日4回、6時30分～11時、13時～18時30分に、湯長の指揮の下に集団で、1回3分間入浴する方法である。湯桁の上に並んで30cm巾、1m長さの板で湯を揉む。高温の湯を熱さましし、湯を柔げる。その時歌うのが湯揉み唄草津節である。20～30分揉んだのち、一同裸になって湯桁の上に膝まづいて、柄杓で湯を30～40杯被る。ベルツが「日本人はかくも用意周到に湯に入る」と絶讃したほど、高温に入るさい貧血を起さないよう、血液を熱で温めておくのである。湯長の「揃って3分」と号令をかける。1分経過する。「改正の2分」「限って1分」「いまちつくりの御辛抱」「辛抱のしどころ」「さあよかったら上りませう」。真赤になって一斉に上り、おばあさんが湯に浸った熱いタオルをしぼって背中をふいたり、湯長が患部に熱い蒸しタオルで3～5分湿布するように押し付けてやる。1879年(明治12)の記録には51℃の高温の湯に入ったとある。1905年、入浴中に死んだ人の霊を慰めるために光泉寺境内に入浴逝者供養塔が建てられた。

湯揉みに唄が入るようになったのは明治末か大正になってからで、はじめはお故郷<sup>くに</sup>自慢の佐渡おけさ・伊那節などの民謡が、ついで軍歌がよく歌われた。「ココハオクニノ何百里」。驚の湯前の宿に泊っていた書生が、越中島の東京高等商船学校の生徒がよく歌う「ダンチョネ節」を唱っており、これが湯揉みのリズムによく合って、しかも書生が美声の持ち主であったことからやり出したという。

三浦三崎でどんと鳴る浪はヨ

可愛い船長さんの

度胸だめしダンチョネー

この歌が編曲され、唱いつがれたものが「草津湯もみ唄」である。

有名な草津節は、この後にできたもので、この原歌は茨城県矢田部村（現波崎町谷田部，利根川に面し波崎の北西にある旧村）付近で唱われている潮待ち唄げんたか節であろうというのが、東京芸術大学教授町田佳声の説である。事実、明治末には鹿島灘から多くの漁師たちが湯治に来ていたという。草津節は浴客達の間に人気を呼び、またたく間に草津の時間湯浴場にひろまり、次いで全国を風びするに至った。櫓を漕ぐ調子と湯を揉む調子がうまくかみ合ったのが、定着した理由と考えられる。1925年東京放送局がラジオ放送を開始する以前に、北海道から九州まで流行したのは、大正中期の世相の中で、草津節のリズムがアピールするものがあったためであろう。1928年の初放送以来、NHK前橋放送局から、草津節は全国に放送された。

明治期の草津温泉は、主に夏季に29日間ほど滞在する長期客が多く、主に群馬県内のほか埼玉・東京からの客が多かった。ベルツ来草の翌年、1879年、スウェーデンの探検家ノルデンショルト（Nordenskiöld, A. E.）が北氷洋横断に成功しての帰途、横浜から来草した。その著『ヴェーガ号周航記』の中で、「我々一行は10月2日硫黄泉で名高い草津温泉を訪れた。ここは多くの浴客が諸疾患を癒そうと方々から集って来る。町はそれらの人々でにぎわっている。……湯は開けっぱなしで、しかも男女混浴であることだ。……で、浴客は大抵道で着物を脱いだり着たりするのである。」と述べている（図2）。

1910年には電話が架設され、翌1911年には自動車も入り、1919年には電気が入った。1908年の大火

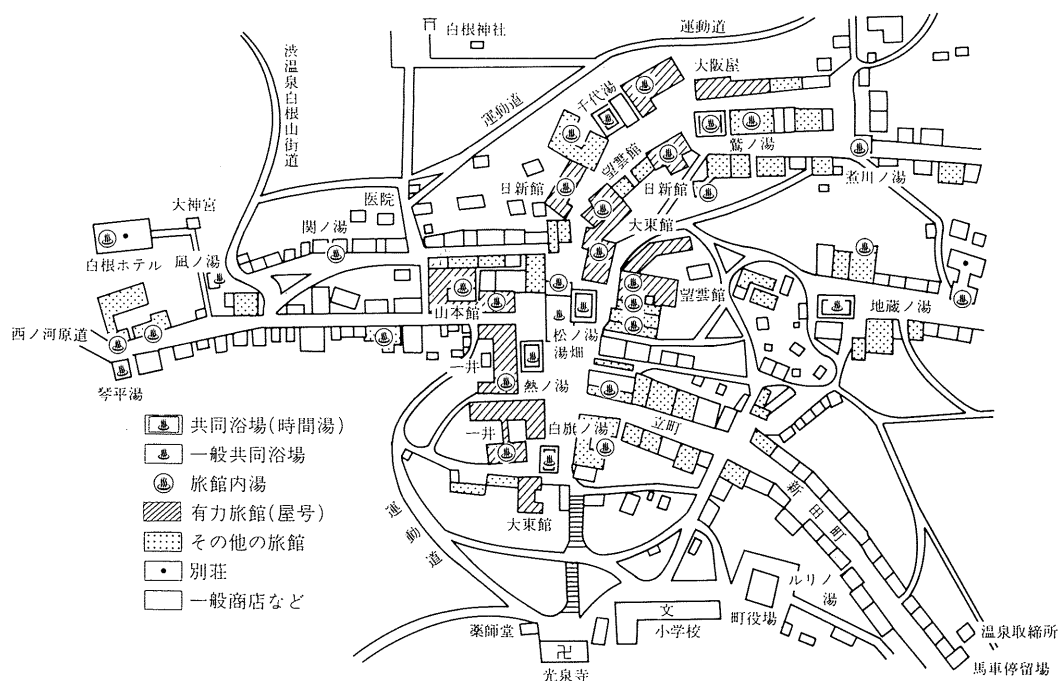


図2 明治末期の草津温泉（1910年）  
（草津温泉誌 第2巻）

で類焼を免れた望雲館のオーナー黒岩忠四郎は鉄道建設を天の啓示と感じ、茅・笹を原料としたパルプ搬出も兼ねて1909年輕便鉄道敷設のための草津興業株式会社（1912年草津輕便鉄道株式会社，1924年草津電気鉄道株式会社と社名変更）を設立し，1913年11月新輕井沢——小瀬温泉間9.9kmが着工した．1926年には全町民の念願であった草軽電鉄55.5kmが開通し，来客が増えていった．それまでは草津へは，①中条，②輕井沢より，いずれも40km，人力車か馬で1日かかっていた．輕井沢ルートの方が客が多く，客引合戦もすさまじかった．第2次大戦末期は3,000人の学童疎開や数百名の傷病兵の受け入れを行ない，町内の旅館はすべてそれらの宿泊所となっていた．

#### 4. 高度経済成長期

第2次大戦の苦しい時期から，1960年代の高度経済成長期までの歩みを年表的にたどってみる．

1945年1月2日開通した長野原線は，その前年創業の群馬鉄山（六合村<sup>おおし</sup>太子）の鉄鉱石を運ぶために3ヵ年という短期間で建設されたが，褐鉄鉱は低品位で硫黄分を含み，1965年に閉山された．長野原——太子間は鋼管鉱業から国鉄に編入され，客車も乗入れたが，1970年10月，経営不振から廃止された．

終戦の翌年1946年，前口・ウレイ野（前口の東側）・本白根（市街地南隣部，標高1196m）で開拓が始まり，小麦・裸麦・アワ・ヒエ・大豆などの雑穀が栽培され，48年からは換金作物として花いんげん・馬鈴薯を栽培し，ほとんどの入植農家はジャージ種の乳牛を1～2頭飼育し，草津農協ができた．

1948年，天狗山にカラ松で櫓を組んだ日本最初のリフトが完成し，リフト座席には近くの硫黄鉱山で鉱石を運ぶバケツが使用され，東京——草津間に直通スキーバスも運行されるようになった．1949年には上信越高原国立公園に指定された．1950年には西隣りの万座鉱山で硫黄の採掘が始まり（9月），西武資本のスキー場開発と対立するようになったが，1960年に調整がつき，観光と鉱業の両立が図られて，本白根，弓池スキー場が開発されることになった．1951年に温泉医学研究の中心として群馬大学付属病院草津分院が湯の沢地区に設置され，1972年に現在地へ移転し，跡地に町営の大滝の湯共同浴場（建設費2.5億円）がつくられた．

1959年になって漸く上水道が完成し，家庭に水道が入るようになった．翌60年に，町は白根山側からの西武資本に対抗して，1.2億円をかけて殺生河原（標高1550m）——白根山逢の峰（1910m）の白根火山ロープウェイを開業し10月には逢の峰スキー場とリフトを建設した．

1962年，ベルツ博士の生地 Bietigheim 市と姉妹都市となり，同年草軽電鉄は廃止となりモータリゼーション時代に入った．1964年，長野原町大津から草津までの9.5kmをアスファルト舗装して草津有料道路が完成し，長野原駅——草津間は20分短縮されて30分となった．翌1965年，「原生林をゆく雲の道」と称される志賀草津高原ルートが開通して長野方面からのアクセスが容易となり，広域観光流動を引き起し，草津温泉が発展することになった．1966年には仲町の湯畑広場北東角に9階建の大東館が建ち，旅館の高層化時代が始まった（写真4・5）．草津温泉バスターミナルがオープンし，国鉄や私鉄のバスが発着し，役場の東隣りでもあり，CBDの中核となった．草津町南端前口パークラン

ドゴルフ場がオープンし、73年には84人の従業員をかかえ、草津・六合・長野原から労働力を吸引し、2/3は女子労働力のキャデーであった。年間2万人の来客があり、89年には3万人を越えた。志賀草津高原ルートは1970年9月から舗装有料となった。1971年には上野——長野原間に特急白根号が運転され出した。

1967年、天狗山レストハウスが完成し、13年後の草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバルの会場を提供することになる。1970年には万代鉾温泉が硫黄採掘をしていたところから96℃の高温の湯が地下400mから毎分2,600～3,000ℓ湧出し、冷却水によって熱交換して54℃まで下げて給湯され、副次的にできる温湯は家庭用生活温水として提供されるようになった（写真3）。

1979年10月1日にはドイツのRomantische Straßeに沿う「中世の宝石」と呼ばれるRothenburg ob der Tauberの城門に刻み込まれたラテン文字PAX INTRATIBUS SALUS EXEUNTIBUSを、東山魁夷氏に翻訳してもらって、「歩み入る者にやすらぎを、去りゆく人にしあわせを」を町民憲章とした。観光都市草津には最も適切な標語であり、日本最高級ホテルのホテルオークラでも、社員教育としてこの標語が用いられている。

## 5. 高原の開発

伝統的な草津温泉は湯畑を中心とする盆地の狭い谷間に65軒もの旅館が密集していた。1960年代の高度経済成長にともなう鉄道・道路・スキー場・ゴルフ場、旅館の大型化などにもなって、盆地内での収容力に限界がみえ始め、広い周辺の高原地に目が向けられ始めた。

高原開発に当たっての問題点には二つあった。一つは強酸性の湯をポンプアップする耐酸資材がなかったこと、二つは大部分が国有地であったことであった。1960年、群馬県土木部は草津高原都市構想を発表し、市街南隣地、本白根開拓地153ha（入植者16戸）の農地を買収し、温泉を引き、高原別荘地を作ろうというものであった。

### 地元資本

地元でも二人の高原開発者がおり、一人は萩原亮町長と、他は大阪屋旅館のオーナー中沢清元町長一族であった。技術問題は荏原製作所・積水化学などの努力で塩化ビニルパイプができ、近年は耐酸性のチタン合金によるポンプなどが使用されるようになった。萩原は1960年頃旅館を廃業し、自分の源泉閣の揚湯に成功し、1963年に温泉配湯会社を設立、市街北側の保養所地区に配湯したり、自己所有の南部高台一帯の土地を、東京の不動産業者千代田興業や小田急不動産へ売却して、温泉付別荘地開発に大きな役割をはたした。萩原の草津温泉配湯株式会社設立趣旨（1963）によると、「草津市街地周辺の民有地は、スキー場下の折目原台地14万坪、西の河原南の迷ヶ原台地4万坪、市街地南東の舟の尻台地10万坪、合計30万坪しかありません。」と記されている。

1974年に万代鉾から出た温泉は毎分6,200ℓ（町全体の1/6）、146の旅館・町営浴場・その他へ給湯され、その中で大きなものは草津東急ホテル197ℓ、ナウリゾート80ℓ、その他高原地区のペンション・民宿・保養所などである。

江戸中期、大阪屋の祖中沢もくえもんは破産して江戸へ出、大阪屋孫八で修業した。そこは穀物・



ミソ・ショウ油などを扱う問屋で、ここでの奉公の後、幕末に帰草し、その後草津町の中核となり、現大阪屋社長は8代目に当る。中沢一族は1968年、自ら先代から引き継いだ市街北東部の20haの高原に、ドイツのBad Nauheim (Frankfurt a. M. 北30km) をモデルに、温泉保養公園ヴィレージを開業した。高原北部を取り囲む環状道路(通称ベルツ通)の外側に、ホテル・貸別荘・リゾートマンション(34~69m<sup>2</sup>, 950~2,300万円)・室内プール・ボーリング場・大浴場・テニスコート・ミニゴルフ場・アーチェリー・サイクリングコースなど、近年はテルメテルメという各種のスポーツ性温泉を内包した一大ヴィレージで、オレンジ色の屋根で統一されている(写真1)。朝食はバイキング方式で、部屋数167(草津最大)、収容力600人をようし、オープン直後は国鉄列車内にヴィレージの全望の写真入りで広告を出していた。その雇用力も大きく、130人に及び、全国から求人し、従業員用の宿舎も別棟にある。

中沢ヴィレージに続いて、オールド草津から高原へ規模拡大を求めて進出するものが続出した。天狗山スキー場東側に奈良屋がナウリゾート、山田屋がホワイトタウン、一田屋がハイランドホテル、吉田屋がスカイランドホテル、南の高台には丸万がグランドホテルをオープンさせた。

ベルツ通り内側、町営住宅団地北側に、1970年2月、日本最初の綿貫ペンションがオープンした。オーナーは中之条町の自己所有地を売却、白根硫黄鉱山の退職金を加えてペンションを始め、300坪のうち200坪は中沢ヴィレージの土地を借地し、ヴィレージと一体となって集客・宣伝し、開設初年度から黒字経営であったという。綿貫ペンション西側はペンション街となっている。

### 外来資本

1960年頃、長野原の酒造業者が光泉寺西側の高台に草津白根観光ホテル桜井を、河原湯の旅館業者が西の河原源泉を揚湯して、西の河原を見下ろす高台にホテルサンバレー(現在は倒産してサラ地)をオープンした。地元民は反対であったが、これを契機に地元の旅館も高原に発展的移転をしていった。草津東急ホテルは旧草軽電鉄草津温泉入口駅跡地に、1969年12月、建設された。1926年全通した草軽電鉄は、1945年には東急電鉄の系列下に入り、1962年軌道は撤去された。6haの土地に、南から草津盆地を見下ろすように102室(収容力450人)の白亜のビルがそびえ、西の河原を東急が町と権利関係をめぐって訴訟したこともあって、70年1月10日まで草津温泉旅館組合には加盟できなかった(写真1)。

前述の萩原亮は、東急ホテル東側の土地9haを千代田興業へ、7.7haを1971年に小田急不動産へ売却し、それぞれ別荘開発を進めた。千代田興業は軽井沢で小規模な別荘分譲をしていたが、それまで池尻のこの地を山林のまま分譲していた東京の鳩和会社が資金難に陥った時これを買収し、三菱地所の手で別荘地を造成して1968年秋から別荘分譲を始めた。社長は日本信託銀行退職者で、その後埼玉県農協の土地、草軽電鉄の土地、福住旅館の土地を買収して開発し、総面積15.8ha、1971年の第5次分譲時には250区画が販売され、1区画200~790m<sup>2</sup>で、価格は300~500万円、坪単価4~7万円と高かった。東京の法人の保養所として購入されたものも多く、1区画に付、1口毎分2ℓの温泉が供給され、引湯協力金は1口25万円、使用料は1口月3,000円であった。1978年には430区画ある。千代田興業に東隣する小田急別荘地でも170区画が開発された。

東京の第一ホテル不動産株式会社は万座硫黄 KK の子会社白根温泉開発会社が所有していた土地を 1974 年に買収、横浜の太洋不動産会社は天狗山に近い 1.3ha の土地を孺恋村民から買収した。中沢ヴィレッジはホテル建設を請負った竹中工務店の子会社朝日土地に、ヴィレッジ西方の 8.7ha の土地の開発を委ね、会社の保養所用の土地開発が行なわれた。ヴィレッジ東方の 15ha の土地は日本信和会に開発が委ねられた。

### Ⅲ 多角的リゾート地の形成

1960 年代の高度経済成長期を過ぎると、その間に草津にも従来なかった新しい文化が重層し、古い文化の上に積み重ねられていき、新たな文化景観が形成されてきた。リゾート活動を温泉入浴・スキー・音楽・長期滞在・イベントなどに分けて分析し、それらによって草津町の文化景観がどう変わったかを検討する。

#### 1. 宿泊施設・土産物

長野原から草津道路を通過して北上すると、両側の森からこつ然と視界が開け、草津市街が位置する盆地が一瞬目に入る。密集した和風の家の中から、ドイツ風の切妻屋根のバスターミナルと町役場、盆地縁を高層のマンションやホテルのビルが縁取っている（写真 1）。バスターミナルから湯畑へ下る道沿いには土産物屋・旅館・飲食店などがごちゃごちゃと並び、湯畑の広場へ出ると、ドイツのマルクト広場を思わせるような広場と、湯煙を上げる温泉の湯畑。それを取り囲んでホテルや土産物屋の高層ビル、4 階建てのおみやげ本多のドイツ風の切妻の木骨造り（Fachwerk）などが日本の伝統的な土蔵造りと調和している（写真 4・5）。

#### 〔入込客〕

草津への入込客数は 1953 年 20 万、1964 年には 80 万であったが高度経済成長とともに増加し、1972 年には 230 万まで行ったが 73 年のオイルショックで 200 万に減ったものの以後 82 年までは 220 万前後を維持していた。83 年には国体を開催し、大滝の湯が完成したにもかかわらず、白根山の噴火と台風来襲のためか 200 万を切った。しかし、その後は一貫して増加傾向を示し、1994 年には 308 万にまで増えた（図 3）。94 年の宿泊者数は 199 万で、宿泊者率は 64.5%、84 年の 71.8% に比べると若干落ちて日帰り客の割合が増えている。60 年代の高度経済成長期は観光バスでの団体 1 泊型が主流であったが、80 年代からは小グループによる個人旅行へ、さらにはヤングを中心に高原地区を志向したマイカー型が多くなってきた。旅館も客の高級化志向に合わせて改築をせまられ、駐車場の確保も重要な要素となってきた。

観光客の発生地は関東を主体に関西・中京から全国にわたっている。中小旅館の得意客は高崎線沿線と横浜が多い。宿の立地で見ると、盆地にある宿は伝統的に半分は東京からの客であるが、高原にできた新しい宿は中部・関西からの客が相対的に多い。来客の季節は 8 月がピークで、次の極大は 10 月と 5 月であるが、傾向としては周年化の方に向いている。宿泊客の 1994 年の月別比率では、8 月 12.8%（26 万）、10 月 11.4%（23 万）、11 月 8.4%（17 万）の順である。4 番目は 1 月の 8.0%（16 万）

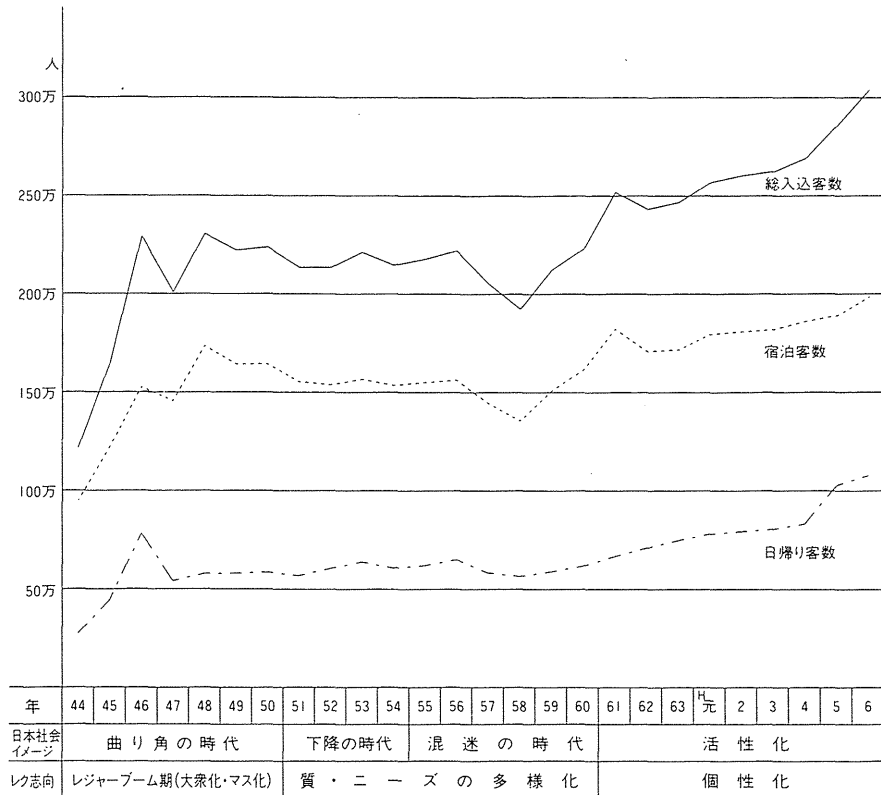


図3 草津町への入込客数  
(草津町役場の資料による)

で、冬季スキー客が増えている。

#### 〔ホテル・旅館〕

草津温泉にある宿泊施設(1996)179の収容人員は13,388人で、町人口8,294の1.6倍にも達している。宿泊施設は1988年までは増えているものの、それ以後は大型のホテルも民宿もペンションも淘汰されたものが出ている(表1)。政府登録旅館・ホテルの収容人員は330人から増え続け507人にまで大型化している。逆に日観連旅館は年々収容人員が減って、1970年の137人から96年には半分以下の64人と小さくなっている。一般旅館もやはり小型化している。民宿・ペンションの規模は変化が少ない。公的保養施設としてはグリーンハイツ(林野庁)(収容力56人)・ホールサムインしゃくなげ(社会保険)(32人)・アルペンローゼ(埼玉県市町村共済102人)・草津セミナーハウス(国立大学)(120人)・草津グリーンパークパレス(国民年金)(111人)・JR東日本草津荘(106人)・簡易保険草津保養センター(180人)・草津ユースホステル(100人)などがある。

人口8,300の草津町に200人前後の外国人登録があり、女性が男性の倍いる。1992年の229人がピークで、以後漸減し、94年は192人いた。日系のブラジル人(49人、1994年)・ペルー人(37人)が急増し、その他韓国人(61人・1993年)・フィリッピン人(20人)がおり、皿洗、清掃・洗濯などの裏方の仕事に従事しており、南米よりの航空運賃ローンの支払いに苦勞している。

表1 草津町の宿泊施設の変化

年	1970			1978			1988			1996		
宿泊施設	軒数 (A)	収容人数 (B)	B/A	軒数 (A)	収容人数 (B)	B/A	軒数 (A)	収容人数 (B)	B/A	軒数 (A)	収容人数 (B)	B/A
政府登録旅館・ホテル	9	2,970 <sup>△</sup>	330	14	6,310 <sup>△</sup>	451	13	6,279 <sup>△</sup>	483	12	6,079 <sup>△</sup>	507
国親連旅館	2	500	250	4	900	225	3	710	237	1	150	150
日親連旅館	31	4,250	137	40	4,445	111	45	3,686	82	37	2,357	64
一般旅館	71	3,482	49	70	2,662	38	69	2,383	35	70	2,422	35
民宿				24	513	21	22	418	19	14	308	22
ペンション				18	549	31	39	1,526	39	35	1,145	33
会員制ホテル・保養所、 ユースホステル				4	293	63	8	800	97	10	927	93
計	113	11,202	99	174	15,681	90	199	15,802	79	179	13,388	75

(各年次観光要覧草津より作成)

## 〔ペンション〕

1970年の綿貫ペンションが、そもそも日本におけるペンション第1号であった。中沢晃三氏がドイツのパンジオン (Pension) からヒントを得て民宿とホテルの中間をねらった洋風民宿が、日本独特のペンションとして確立されていった。家族労働力で客をもてなすのが基本であるので、6～13室、収容人員も20～40人というところが多い。ペンションはある地区に集団をなして立地している観光地が多く、草津もベルツ通りと平行する綿貫ペンションのあるペンション通りと、市街地南東端の小田急別荘地の中である。草津夏期国際音楽アカデミー＆フェスティバルに参加する人への協力をめざして草津高原ペンション協会から分離した草津ペンション協会が中沢晃三氏の音頭で発足し、今日では主流となっている。

## 〔民宿〕

1978・1988年には24軒・22軒あったが、96年には14軒に減り、総収容人員も513人から308人に減ってしまった。民宿とは本来農家なり漁家が兼業としてやるもので、草津には民宿を受け入れる基盤が弱いことと、ホテルの大型化、ペンション・リゾートマンションの増加によって、衰退していくであろう。

## 〔土産物〕

草津町の卸小売業は333事業所(1993年)で町全体の38.2%を占め、従業者数も1,261人と19.2%を占める重要な産業である。商業統計(1993年)による商店数は216あり、土産物店が含まれる「その他の小売業」は96、従業者数は266人(男133, 女133)、年間商品販売額は39.5億円で、町の26.6%を占めている。土産物店が集積しているのは、①バスターミナルから湯畑へ下る立町通り筋、②湯畑広場、③湯畑から西の河原への西の河原筋の3ヵ所である。従業者1人当販売額は1488万円で、県内では伊香保・水上よりは2割ほど多い。

土産物店では多くの商品が売られているが、文字通りの土産物は、湯の花・温泉まんじゅう・はいんげん甘納豆・山菜佃煮・土鈴である。

「湯の花」は湯畑の中に設けた箱にたまったものを奇数月に3日間かけて採取する。1回600kg位

で、土建業者により女子労力4～5人で採取し、倉庫に入れて2ヵ月乾燥し、カップ詰めにして商工会を通して60軒ほどの土産物屋に卸される。年間1.5万カップ生産され、商工会を通じて年間700万円が町に納められる。この量では足りないのが、この3～4倍が他の源泉から採取されたり、ゴムの粘着剤として利用されている硫黄を「湯の花」として売っているものもある。

「温泉まんじゅう」は町中どこでも湯気を立ててふかしている光景を見るが、老舗「満充軒・さいふ屋」は西の河原通り南側にある。1914年創業で、それ以前は財布屋であった。一井旅館に促められて湯治客相手の和菓子屋を営んでいた。当時は4km離れた山中の温泉の湯と、白い粉、白砂糖をこね、独特の手法で薄茶色のまんじゅうに仕上げられていた。1950年頃よりまんじゅう専業となり、65年頃より観光客の増大（65年の入込客97万人）によって爆発的に売れるようになった。65年頃より機械製造が行われるようになり、71年には売上げ2000万円に達した。現在は製造元が15に増え、売上げは1200～1300万円に落ち込んだ。旅館や他の土産物屋に卸したりして、町のまんじゅう総売上げは6億円にまで及んでいる。

「はないんげん甘納豆」 北海道が原産地であり、1913年当地に入ってきて、当初はオニマメと呼ばれ、海拔1000m以上でも栽培されるので食糧難の時代に貢献した。老舗「清月堂」の外2～3軒しかなく、機械化できない点で新参者が入れず、清月堂では売上げ2億円、13人の労働者を有する法人にまで成長している。原料は北海道や中国、地元農家との契約栽培などで確保している。

「山菜つくだ煮」 西の河原入口にあるさくら物産と外1軒のみで、これも特殊な技術がいるために、新参者がなく、ピークの79年には1億円の売上げがあった。現在は7000万円まで下っている。原料のうち地元産はさんしょう、やまうど、しいたけで、ぜんまいは新潟から、その他北海道・中国から仕入れている。

「土鈴」 民芸品を扱う店主自ら北軽井沢・岐阜の土とまぜて45種類の土鈴を焼いている。十二支や道祖神などで、76年のピーク時には800万円の売上げがあった。東京と高崎へも出荷しているが後継者がおらず、先ほそりである。

土産物店はもともと湯治客相手の雑貨店から出発し、やや専門化したのは第2次大戦後のことである。大きなホテル・旅館は内部に土産コーナーを設けて客を押え込んできたので、土産物店としては、ファンシーショップや民芸品に特化していかないと存続し難い面がある。

## 2. 共同浴場

町内に19あり、本来は湯畑周辺にあったものが、長期湯治客に利用されていた（図4）。熱の湯・松の湯・白旗の湯・滝の湯・千代の湯・鷲の湯・地蔵の湯の6つの湯では、1910年には時間湯が行われ、現在でも地蔵の湯と千代の湯で行われている（表2）。時代とともに住民の公衆浴場の機能が加わってきて、1950年代60年代に湯畑の外縁に建てられた千歳の湯・長寿の湯・睦の湯・喜美の湯などがそうであり、1974年からは万代鉦からの湯が利用できるようになって、さらに遠方の恵の湯・町営の湯・こぶしの湯などがつくられた。

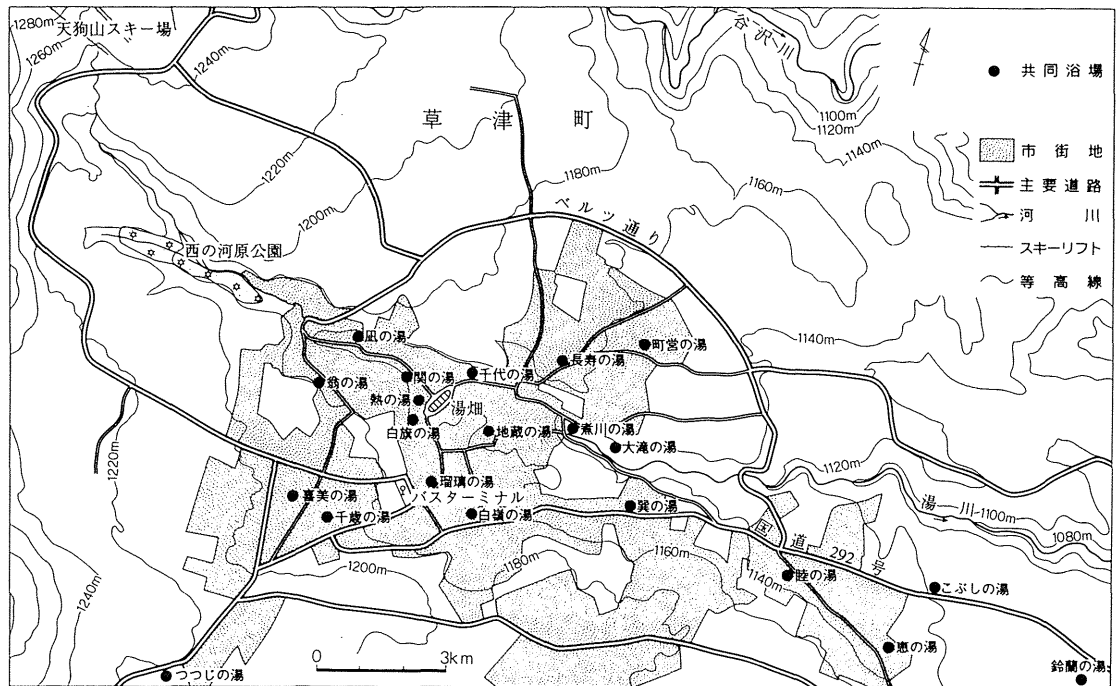


図4 草津の共同浴場

表2 草津町の共同浴場の管理と利用

名称	所在区	所在区の世帯数	源泉名	源泉の所有者	現在の建物の建設年	面積 ㎡	管理方法	利用者
千代の湯	滝下区	42	湯畑	群馬県	1968	90	湯長による管理。	観光客。時間湯は湯治客。
煮川の湯	滝下区	42	煮川の湯	群馬県	1988	37	町が直接管理。区費の使用なし。	観光客が多い。鞍塚区や馬場区など他の区民の利用者が多い。
つつじの湯	南本町区	294	万代鉱	草津町	1978	64	区費による。清掃員を雇っている。	区民。区内に働きに来ている人。観光客も多い。
白旗の湯	仲町区	30	白旗	群馬県	1992	254	町が直接管理。区費の使用なし。	区民は入っていない。観光客のみ。他の区民も入る。
関の湯	泉水区	183	地蔵	群馬県	1986	19	付近の人の当番制で清掃を行っている。	住民のみ（住民以外はお断りの表示あり）。
翁の湯	泉水区	183	湯畑	群馬県	1971	25	寄付による。	区民。
風の湯	泉水区	183	風の湯	草津町	1986	23	付近の人の当番制で清掃を行っている。	観光客が多い。
千歳の湯	本町区	116	湯畑	群馬県	1985	46	区費から支出。	主に区民。たまに観光客も入っている。
喜美の湯	文京区	301	湯畑	群馬県	1991	57	区費による。清掃員を雇っている。	区民。観光客（内湯のない民宿のお客が多い）。
地蔵の湯	地蔵区	45	地蔵	群馬県	1968	96	湯長による管理。	地元の人。他の区の人。観光客。湯治客。
白旗の湯	立町区	209	湯畑	群馬県	1984	44	入湯している世帯から300円を徴収。	区民。
長寿の湯	西鞍塚区	206	湯畑	群馬県	1980	48	区費による。清掃員を雇っている。	主に区民。内湯のない民宿のお客も。
町営の湯	東鞍塚区	314	万代鉱	草津町	1980	73	区費による。清掃員を雇っている。	80%が町営住宅の人。他に周辺住民、民宿の宿泊客。
瑞穂の湯	新田区	113	湯畑	群馬県	1985	30	区費による。清掃員を雇っている。	区民。立町区の人も入る。観光客も。
箕の湯	馬場区	208	湯畑	群馬県	1992	85	改築後は区費で管理の予定。	（現在改築中）
陸の湯	昭和区	312	湯畑	群馬県	1989	70	区費による。清掃員を雇っている。	区民。ときどき観光客も入っている。
恵の湯	昭和区	312	万代鉱	草津町	1978	48	区費による。清掃員を雇っている。	区民。観光客。付近の労働者。
こぶしの湯	昭和区	312	万代鉱	群馬県	1991	36	区費による。清掃員を雇っている。	くまざき村（こぶしの湯付近の地名）の人。観光客。付近の労働者。
鈴蘭の湯	鈴蘭区	61					（町の所有外）	国立栗生楽泉園の職員のみ。

(聞き取りによる)

共同浴場は町が所有し、町の公益事業部温泉課が管理しているが、煮川の湯・白旗の湯・鈴蘭の湯以外は区が実質的な管理を行なっている。1954年に松の湯、1970年に驚の湯、1972年に滝の湯が閉鎖された。熱の湯は1960年に観光客に湯揉を实践してみせる有料の観光浴場へと変られ、日に数回、30分間の「湯揉みショー」が行われている。大滝の湯〔草津町保健センター〕以外は全て無料である。ちなみに1994年度の町の温泉管理費は2,959万円で、一般会計（45億円）の0.7%であった。

19の共同浴場は、①療養機能をもつもの、②公衆浴場機能をもつもの、③千代の湯・白旗の湯・煮川の湯のように観光地シンボル機能をもつものに、3つの類型が考えられる。

### 3. スキー場

オーストリアからの軍事使節レルヒ少佐が新潟県高田12師団で1911年にスキーを教えたのが、日本のスキーの嚆矢であった。ここで一般人として参加した飯山中学校の教師市川達讓が1912年に持ち帰った2台のスキーをもって、中学でスキー部を創設した。草津町の内堀判次は1915年に飯山中学校でスキーを習得し、翌1916年草津で有志とともにスキークラブを結成し、これが日本で2番目のスキークラブとなった。

第2次大戦後の1948年、日本最初のスキーリフトが天狗山に架設されて以来今日まで、16本のリフトが架けられている。その間、1982年第31回全高スキー大会（インターハイ）が開催され、1983年第7回全日本スキー連盟オールドパワースキー大会、第38回国民体育大会冬季大会スキー競技会（2/20～21）が開催された。現在11カ所にスキー場があり、年間80万人のスキー客が入り、スキーコースも草津音楽の森スキー場や天狗山ゲレンデのような初心者向けから、本白根・清水沢・振子沢などの中・上級者向けコースなど多様なスキー場がある。79年12月からは雪不足解消のためにスノーマシン（人工降雪機）が導入され、現在24台に達している。1983年は天狗山にナイター設備が設けられ、13万km<sup>2</sup>は日本一の面積となっている（図5）。

### 4. 草津国際音楽祭

映画「ここに泉あり」（独立プロ新星映画社、今井 正監督）が1955年2月封切られ、群響の名は一躍全国に知れわたった。わずか8億円の予算規模の人口13万の高崎市が、1957年に3.4億円の音楽センターを建設した（辻村、1984）。これらを維持するために、1977年林健太郎東大学長を理事長に「関信越音楽協会」が発足した。群響の技術指導者としてベルリン芸術大学教授で世界的なバイオリニスト豊田耕児氏の招聘に成功し、2年後群響の指導だけでなく、豊田氏の意向で夏期2週間音楽学校を開き、世界の巨匠を呼んで次代を担う若い人々に個人レッスンすることになったのが1980年から始まった「草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバル」で、1996年夏まで16回を数えている。

豊田耕児・関信越音楽協会がこのプロジェクトを行なう場所として白羽の矢を立てたのが、草津であった。温泉とスキーの町から、何か新しいものを創ろうとしていた中沢清前町長、荻原亮町長（当時）の協力で、天狗山スキーロッジを利用して、1980年8月18日から31日までの2週間、昼は個人指導、夕方16～18時は避暑・保養客向けのコンサートが行われた。1991年からは22億円をかけて、高さ

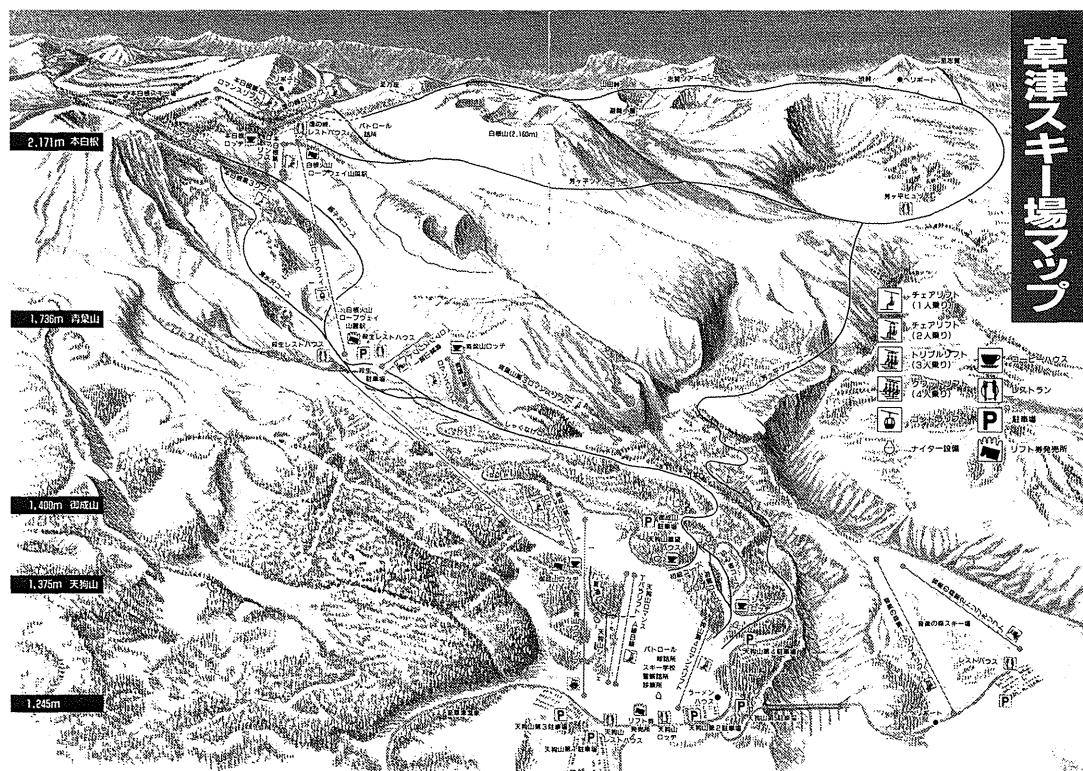


図5 草津町のスキー場  
(草津スキーガイド特集号'93)

23m, 608シートの本格的なコンサートホールが「草津音楽の森」に建設され、コンサートはここで  
行われるようになった(写真9)。広々とした1350~1250mの高原の2.9万 $\text{m}^2$ の敷地に2450 $\text{m}^2$ のワン  
フロアの六角型のホールは自然光を採り入れ、高原の背景も考慮してある。ハヶ岳高原音楽堂を設  
計した吉村順三の設計、清水建設施工である。生徒にとっても師の巨匠が演奏する姿を見れる点で有  
意義である。

音楽の森は1987年、群馬県企業局が国有林の森林空間総合利用整備事業(ヒューマングリーンプラ  
ン)の指定承認を得て、町の北側の谷沢原を開発し、ゴルフ場とスキー場を「草津音楽の森ゲレンデ」  
として一部89年には全面オープンした。経営は第3セクター「草津音楽の森株式会社」を1990年に設  
立してその任に当たらせた。資本金は5000万円、草津町51%、美津濃(株)20%、清水建設(株)20%、  
群馬銀行2%、東和銀行2%、草津温泉旅館共同組合5%の割合であった。

1980年の第1回アカデミー受講者は90人、第2回は186人、1991年は329人で20代の若い人が多く、  
第1回目からアメリカ・中国・韓国の外国人受講者が10名もいた。第1回はバッハ、第2回はモーツ  
アルト、第3回はブラームス、以後シューベルト、ハイドン、バッハと四人の息子たち、シューマン、  
モーツアルトとマンハイム学派、フランス音楽、ベートーフェンと10回までは作曲家を中心としたテー  
マが選択されていたが、11回目からは時代をテーマにするようになっている。ヨーロッパでは、7月



末から6週間行われる Bayreuth ヴァーグナー音楽祭, Salzburg 音楽祭, Bregenz 音楽祭, Schwetzingen 音楽祭 (ハイデルベルク西5km) などが行われているが, 草津のものは, デンバー西方100kmの鉾山町から音楽・学術町に変身したロッキー山脈山中の Aspen に近い。日本でも信州木曽福島, 大分県日田などの音楽祭が行われたり, 信州南牧町海ノ口にハケ岳高原音楽堂 (収容人員250人) があるが, 草津の場合は実態があって, 後でその入れ物を作った点で強味がある。草津夏期国際音楽アカデミー & フェスティヴァルには文化庁が780万円, 群馬県が1,500万円援助している。しかし, 年間2週間しか利用しない建物に22億円もかけているため, アカデミー友の会をつくって, 赤字補てんのための固定客確保を図っている。音楽アカデミー以外は中学生ブラスバンド演奏会・盲人カラオケ大会・草津民謡, 全国大会など年間数回の利用しかない。

## 5. リゾートマンション

草津町には現在 (1992) 19のリゾートマンションがあり, その戸数は5278戸, 町の世帯数3652 (1995) の1.4倍にも達している (図6・表3)。建設年代をみると, リゾート法制定 (1987) 以後のものが84%を占め, 盆地の温泉街を取り巻いた高台に, 高層な大規模マンションが林立する景観は, 古い伝統的な草津の文化景観を一変させた (写真3)。

リゾート法に基づく税制・資金面での優遇措置, 国有林野活用によるリゾート施設の整備ができる「ヒューマン＝グリーンプラン」(林野庁) にのっとり, 草津町でも2884haの「草津町リゾート整備

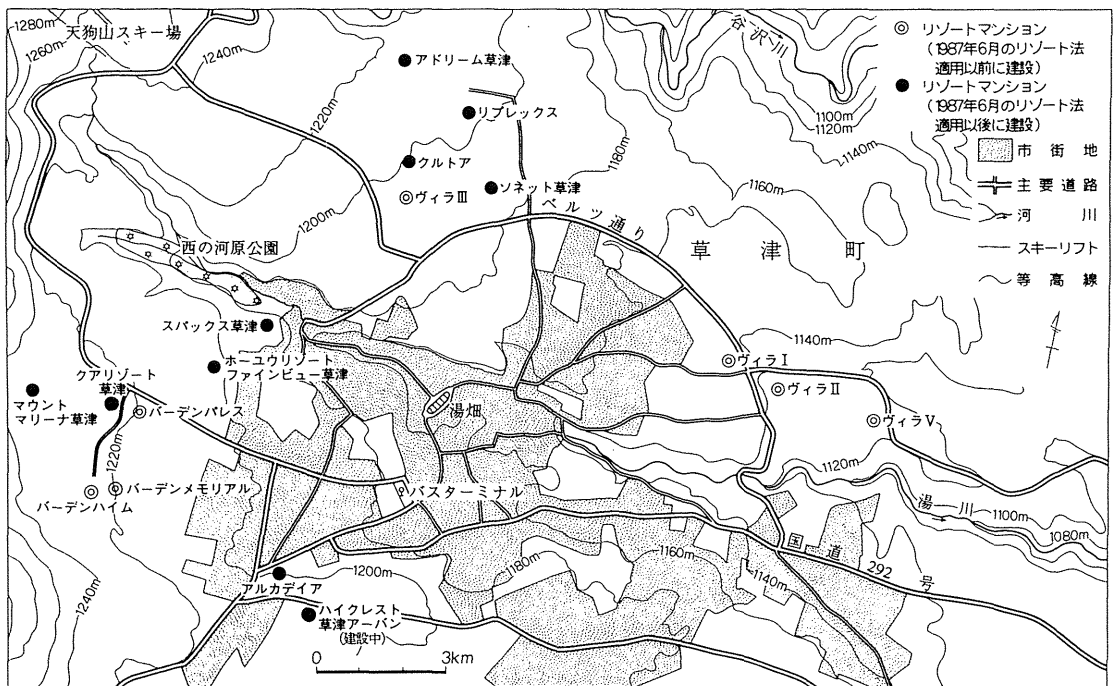


図6 草津町のリゾートマンション  
(役場企画開発課資料より作成)

表3 草津町のリゾートマンションの規模・建築者・施工者

番号	名称	建築主	階数	高さ m	敷地面積 m <sup>2</sup>	室数 戸	竣工年	備考
1	ヴィラ1	(株)中沢ヴィレッジ	地下1地上5	20.7	2,972	78	1977	
2	ヴィラ2	〃	地下1地上7	29.1	8,896	148	1980	
3	バーデンハイム	(株)亀山社	地上6	20.8	4,728	137	1980	
4	ヴィラ3	(有)大阪屋不動産	地上5	18.9	2,384	149	1981	
5	バーデンパレス	(株)亀山社	地下1地上6	24.2	4,393	139	1983	
6	ヴィラ5	(株)大阪屋不動産	地下1地上12	47.6	8,494	282	1984	
7	スパックス	東急不動産(株)他2社	地下2地上11	40.1	6,055	372	1987	ホテル30室を含む
8	バーデンメモリアル	(株)亀山社	地下1地上12	47.0	6,054	215	1986	
9	クアブラザ	クアブラザ(株)	地下1地上9	36.0	8,138	186	1988	
10	ソネット草津	積水ハウス(株)他2社	地下1地上12	43.4	12,696	333	1989	
11	アドリーム草津	イコマ・トレーディング(株)他3名	地下1地上12	42.7	10,647	309	1990	
12	ファインビュー草津	(株)日本企画設計	地下1地上11	46.4	6,858	238	1990	
13	マウントマリーナA棟	(株)亀山社	地上12	44.5	11,184	310	1991	
14	マウントマリーナB棟	(株)亀山社	地上9	34.8	6,538	215	1991	
15	アルカディア草津	海津興産(株)	地下1地上12	52.9	6,991	243	1991	
16	リプレックス草津	喜久物産(株)	地下1地上12	44.1	14,609	530	1992	
17	(仮称)草津高原マンション	佐工不動産(株)他1社	地下1地上12	39.1	11,115	369	1991	
18	(仮称)ピア草津	(株)日康	地下1地上7	22.9	1,109	47	1991	
19	(仮称)草津・萬座硫黄土地開発事業A棟	三菱パーリントン(株)他1社	地下1地上12	36.9		511	1993	
20	(仮称)草津・萬座硫黄土地開発事業B棟	〃	地下1地上12	36.9	(計)39,661	294	1993	
21	(仮称)草津・萬座硫黄土地開発事業D棟	〃	地下1地上12	36.9		170	1993	
22	(名称不詳)	ダイヤ観光開発(株)	地下3地上9	29.4	2,246	154		ホテル24室を含む 着工準備中
23	(仮称)マープル草津	松原不動産(株)	地下2地上11	33.5	2,904	157		着工準備中
24	(仮称)ライベスト草津	ライベ(株)他1社	地下1地上12	41.8	6,619	130		協議中
合計	21棟					5,716		

(1994年 草津町企画開発課資料)

計画を作成した。通常の町政担当助役の外に、公益事業（温泉）と観光事業（スキー場）を担当する事業助役を1979年から設けている。整備計画のコンセプトは、「温泉情緒の残る既存温泉街を“クラシック草津”，その外周の高原地帯を“ニュー・KUSATSU”と位置づけ、観光とリゾートが調和した新しい町づくりを展開する」ものであった。新規大規模開発事業としては、①音楽の森リゾート（国有林活用）、②静可山スキー場（国有林活用）、③白根、天狗山スキー場（国有林活用）、⑤本白根観光レクリエーション広場（民間借地）がある。

計画では音楽の森の中に分譲リゾートマンション11棟・1100戸、1戸建分譲別荘（100戸）が計画されていた。

草津町にある19棟のリゾートマンションの嚆矢は中沢ヴィレッジのビラⅠ（80戸、1977）・ビラⅡ（148戸、1980）・ビラⅢ（149戸、1981）・ビラⅤ（282戸、1984）であったことは前に述べた。これらは湯沢町や白浜町と比べても割合に早い方であった（佐々木 1990・1992）。リゾート法以後、どこでもマンション建設が急増した。1991年度、リゾートマンション13棟2900戸の固定資産税・都市計画税・町民税の合計は3.6億円、一般会計予算35.7億円の10.1%であった。歳入43億円（1995）のうち町税は47.6%に過ぎない中では、10%は大きい。

草津のリゾートマンションのアイデアは、1878年来草のベルツに由来する。ベルツは高原地帯に3.3万m<sup>2</sup>の土地を購入してドイツ式温泉保養地（KurortまたはBadeort）を建設しようとしたが、地元民が温泉の供給を拒んだため実現しなかった。ベルツの考えを実現したのが中沢一族で、老舗の大阪屋旅館の経営者であり、町北東部の高台に曾祖父や祖父が手に入れた20万m<sup>2</sup>の山林にヴィレッジを作り、外環道路（ベルツ通）も1967年に完成させた。当時主流であった一泊団体宴会型から、ドイ

ツ流の娯楽・憩い・治療の3機能を兼ねた長期滞在型（10日間位）へ客を誘導しようという意図もあり、景観調和を考えて18階建てから12階建てにした。全ての建物は白壁にオレンジ色の屋根とした。

中沢一族のビッグプロジェクトを冷ややかに見ていた湯畑周辺の有力旅館が、その成功例を見て、高原に進出していった。1974年奈良屋（小林貴）が天狗山スキー場東にナウリゾートホテルを、山田屋（山本富雄）がホテルホワイトタウンをオープンし、3大ホテルとなった。ベルツ通の小さなホテル群、ファミリーイン（収容力100人）・スカイランドホテル（150人）・ホテルベルツ（100人）はいずれもクラシック草津に旅館をもつ土着の人々が建てたものであった。

草津中学校西の高台に、亀山社が3棟のマンションを林立させた。1980年バーデンハイム（137戸）・83年バーデンパレス（139戸）・86年バーデンメモリアル（215戸）といずれもドイツ名を付けている点が草津である。亀山社は渋川市の「さとり屋呉服店」から出発した「さとり山田電気」で、現在は「さとり百貨店」（JUSCOと提携）が本業で、社長篠満夫の先代が北群馬信用金庫理事長時代に、この土地を購入していたという。外来資本も三菱マテリアル（万座硫黄鉱山）とか、草津と何らかの関係があるか、土着資本との合併でマンションの建設・販売・管理にあたっている。

リゾートの地元に対するメリット・デメリットはすでに言い古されているが、デメリットとしては、交通渋滞・景観不調和・ゴミ投棄・ゴミ処理・上下水道難・インフラ不足・温泉不足などである。そんな事情で1992年9月14日、草津町は「リゾートマンション凍結宣言」を発表した。草津町は1989年に「指導要綱」を作り、軒高を37m以下、温泉給湯停止、地元業者の参画などを盛り込んだが、1991年にはマンション建築計画を持ち込む業者が絶えなかった。

1992年に入ると、景気低迷によって事前協議を終了した10棟のうち9棟が1年以上も着工されないままである。

草津町商工会がKKブレーン（東京都新宿区）に委託した報告書は、この種のものにありがちな手法・時期についての記述の厳密性はないが、1990年に行なった調査によるリゾートマンションの実態は次のようである。

マンション所有者526人の住所は、東京50.0％・埼玉19.8％・神奈川11.8％・群馬10.1％。

〔年令別〕 50代32.1％・60代25.1％・40代24.0％で湯沢よりは高令者が多い。

〔職業〕 会社団体役員27.6％・自営業21.9・会社員16.3。

〔法人〕 所有率は37.7％と湯沢町（29.5％）よりは高い。

〔法人の所在地〕 東京50.9％・群馬25.2・埼玉14.5と個人と同じ傾向ではあるが、県内が1/4を占めている点に特色がある。

〔法人の従業員数〕 ～50人52.5％・50～100人17.0・100～300人17.0・300人≤11.3％と零細・小企業が保養施設として購入したらしい。

法人・個人合せて、

〔購入時期〕 ～85年41.6％・86年6.4・87年9.2・88年15.8・89年17.3・90年2.8・91年6.9。バブルのはじける直前の89年まで購入意欲は旺盛であった。

〔購入動機〕（multiple choice） 温泉浴60.7％・スキー52.4・避暑43.6・自然環境35.0・従業員福祉

## 32.3.

〔1989年7月～90年6月の1年間の月別利用回数〕 年平均8.3回で、8月12.6回、1月12.2・3月10.3・2月10.2・5月9.5で冬季の利用頻度が高い。

〔1回の延べ日数〕 平均2.1日で、8月2.5、1月2.3、5月2.2、2・3月2.1と、あまり月による差はない。

〔延べ利用人員の月別構成比〕 8月14.1%・1月13.6・2月10.6・3月10.3・5月9.8。

〔滞在者の年令〕 30代21.5%・40代18.7・50代18.2、20代は16.7%と、割合若い年代が多い。

〔所有者と滞在者の関係〕 所有者本人47%・家族36%・従業員12%・親戚11%。

〔朝食をとる場所〕 自室調理75%・マンション食堂13%。

〔昼食をとる場所〕 外食61%・自室調理23%。

〔夕食をとる場所〕 自室調理39%・外食32%・マンション食堂18%。

〔食材調達先〕 町内店71%・居住地13%。

〔外食先〕 草津町内65%・旅館ホテル21%。

〔飲食感想〕 普通60%・よい14%・悪い14%。

〔土産品買う場所〕 町内75%。

〔日用雑貨買う場所〕 町内70%・マンション14%・買わない10%。

〔衣料品を買う場所〕 町内22%、買わない63%。

〔滞在目的〕 (multiple choice) 避暑62%・温泉浴55%・保養49%・レジャー35%・音楽アカデミー7%、でアカデミー参加者が395名中27名もいたことは、むべなるかなの感じである。

〔1人当り予算〕 2万円台23%・1万円台21%・3万円台19%・1万円未満12%と、設備投資が大きいと、滞在予算は納得できる額である。

〔交通手段〕 自家用車74%・電車バス22%。

フリーに書く欄には、マンション乱立傾向への不安、町内の交通渋滞と歩行の危険性、食品購入の不便さ、町内飲食店・小売店の味・サービスの悪さなどが記されている。定住者でなく、特定期（夏と冬）のみ来て、ゴミを出し、自分も交通渋滞加害者であることを棚上げした、勝手な要望が多い。

1991年4月、11.4億円かけて市街南部本白根農場の南東端に「草津町クリーンセンター」の新しいゴミ焼却場が完成した。処理能力は40t/日で、それまでの16tの2.5倍である。人口8300人の人が1日1kgのゴミを出すとして8.3tにしかない。179のホテル・旅館・ペンションの収容人数13,400人のゴミ13.4tを加えても21.7tにしかない。5300戸のリゾートマンションが問題で、1901年の実績では、8月に40tの能力を越える日が3日あった。あるマンションは月150～180円/kgでゴミ運搬を業者と契約し、さらに焼却の手数料が1kg5～13円かかる。商店とリゾートマンションは共生関係にあり、寝具販売店などは「おこぼれ」で、掛け布団・敷布団・まくらなど、セットで1軒約20万円。羽毛のセットなら50～60万円もし、マンション入居日など1日に20人の客があったという。電気製品なども地元の方が「アフタケアがいい」との理由で、「特需」はあった。

「マンション族はお金を落さず、食べ物は持ち込みで、後に残るのはゴミだけ」と語られているが、

それ以上に、マンションが高原上に林立したため、クラシック草津の旅館の窓から以前見えた白根山などの眺望が阻害されることになった影響が大きい。それに地元資本との競合関係もあって「1,000m<sup>2</sup>以上の開発事業を行うに際しての事前協議について、1992年9月14日から当分の間これを受理しないこととする。」企画開発課の回覧が出された。西ノ河原公園北の急崖を登った平坦地に、かつてはサンヴァレーホテルとホワイトタウンホテルがあった。これをパシフィックアトラス社が前者を1987年に、後者を1988年に買収した。この会社は石打や熱海でリゾートマンションを手掛けた会社で、熊谷組の100%出資の会社ともいわれ、草津高原開発リゾート株式会社を作り、サンヴァレーやホワイトタウンの元職員を採用している。当初28階建て（76m）、1600戸の超大型マンションを申請したが却下された。町では指導要綱で12階37mの高度制限を設けている。妥協案として20階1600戸で申請したが、町民の2400票の反対署名で受け入れてもらえないままである。反対の理由は①自然環境破壊、②飲料水不足、③景観破壊である。12階建て1600戸の第3次案を再々申請しているところである。草津の現地事務所は元サンバレー経営者が所有する貸別荘を間借りして、2名が交渉に当たっている程度である。

## 6. イベント

（社）草津温泉観光協会発行の「行祭事案内」によると、4月1日から始まるゆもみと踊りショーから始まって、25のイベントが記載されている。これらのうち住民向けのものと、観光客向けのものがあり、前者の例として白根神社祭、後者の例として草津温泉祭りがある。

〔白根神社祭〕 湯畑の真北1.5km、標高1176mにある白根神社の祭神は日本武尊ではあるが、白根山こそ本当の御神体の様なものであると神社の氏子らは思っている。7月17・18日、草津町内各地よりおみこしが繰り出し、湯畑付近に露天商が並ぶ。純粹に宗教的な祭礼のため、自治体は当日の警備以外、一切関係しない。50人程の氏子総代、町内12区の区長、神主の神社関係者が執り行う。資金は各区が割当て金を集め総額100万円ほどを神社に納めている。一世帯3,000円程度、商店やホテルは3～5万円、西の河原通り沿いの大きな店は10万円単位の寄付をしてくるという。

〔草津温泉祭〕 8月1～3日行なわれ、湯畑広場に特設舞台を設け、1日は開祭式湯善神参拝、2日女神源泉お汲み上げ分湯の儀（温泉感謝祭）、3日草津踊り、女神主要浴場献湯の儀が行われる。PRには町の広報予算5000万円のうちから2000万円があてられ、さらに町から祭りの費用として委託金が与えられ、観光協力費（旅館・商店・協会員より）と合せて行われる。3日間で8万人の来客があり、その9割は宿泊する。年間300万の入込み客の3%弱がこの3日間に宿泊する。1人平均1.2万円として8.6億円の宿泊料が町の旅館に落ちる。温泉祭は宗教色の極めて薄い、イベントであり、210軒ある旅館・商店から合計1,500万円ほどを集める。

温泉祭りの原形は丑湯祭で、疫病鎮圧の神たる牛頭天王の崇拝と関係し、8月最初の丑の日、丑の刻に各々の温泉で湯善神に供物を与え、無病息災を祈願した。戦後、湯治客を呼び戻すべく大々的に行なわれて温泉祭となり、8月1～3日に固定された。そのため現在でも地蔵の湯と千代の湯では、従来通り丑湯祭が、温泉祭とは別に行われている。

この二つの内向・外向祭の外は、5月7～8日草津山光泉寺花祭、5月中旬～6月上旬石楠花開花、6月1日氷室<sup>ひじろ</sup>の節句(江戸時代、湯宿の長たちが集って白根山の熔岩流の洞穴の中にある万年氷を採って来て、石楠<sup>しゃくなんば</sup>の花を添えて客膳に供した。この日に、この氷を食べると一年中無病息災でいれるといわれた。)。8月最後の2週間、草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバルなどがイベントの大きなものである。

## 7. 町当局の景観形成

温泉・スキー・音楽の町草津はそれを形成するのにあずかったベルツ博士や、町の性格が似た外国の町と姉妹都市関係を結んできた。

1962年 Bietigheim-Bissingen

1986年 Neustift オーストリア・チロール州、インスブルック南西15km、標高993m、Stubaital 谷にあり、村の教会にはオーストリア＝アルペン＝クラブの創設者の一人である Franz Senn (1831-84) の墓があり、スキー学校もある。

1991年 Snowy River オーストラリア、ヴィクトリア州、メルボルン東北東300km、Snowy 山脈の最高峰 Mt. Kosciuszko 2229m の懷に抱かれた町で、赤道をはさんで36° 緯線に近い。

1992年 Karlovy-Vary (ドイツ名 Karlsbad) ヨーロッパで有名な温泉地で、チェコ、プラハ西方110km、ベルツ博士が“ベルツの日記”の中で、「もしもこんな温泉地がヨーロッパにあったなら、カールスバートよりも栄えたであろう」と書いていることによる。

中沢ヴィレッジ会長はドイツかぶれで、アイデアマンの中沢晃三の発案で、ドイツの Romantische Straße に模して軽井沢－草津－日光間230km を日本ロマンティック街道として1981年に制定し、沿道に標識を設けた。風光明眉な山道を連ねたドライブコースであり、通過する町村の観光ガイドを兼ねたパンフレットが作成されている。

町は竹下内閣「ふるさと創成」1億円を基にして、「Project C」(Clean・Clear・Culture・Classic・Creation) で具体的には、①ゴミ焼却炉改築、②歴史と文学の散歩道、③インターナショナルリゾート計画であった。

町は1990年、「草津町環境整備計画 個性ある街並みの提案」を作成し、クラシック草津地域で、今後、道路・家屋・外灯・看板などを新改築する際には、統一的なクラシックスタイルで行うように、絵入りの仕様書を提案している(写真6)。

1993年には「草津町景観条例」が制定され、温泉街路や広場など対象地域を設定し、大規模建築物等の高度制限、工作物・広告物・宅地造成・鉦物土石採取などの制限や届出義務を課している。改築費などの一部助成をしている。事実、西ノ河原と湯畑の間の家々は、みちがえるような美しさに変ってきた。

草津を訪れた文人墨客は非常に多い。

1808年 小林一茶

1878 ベルツ

- 1879 ノルデンショルト（ノルウェー探検家）
- 1920 若山牧水
- 1923 斎藤茂吉
- 1929 尾崎喜八・高村光太郎・竹久夢二
- 1934 ブルーノ＝タウト

など枚挙にいとまがない。観光商工課では1992年までに1億400万円で文学碑・記念碑・案内板を整備し、「歴史と文学の散歩道」なるパンフレットに個々人の概略とその碑のある場所の地図と碑の写真を載せ、英文解説まで付いている。これは長期滞在客や外国人客をも視野に入れた観光政策である。草津が観光立町であることは町の課の名称が、観光商工課となっていて、観光が商工に優先していることから伺える。町民憲章「歩み入る者にやすらぎを、去りゆく人にしあわせを」が、草津町の性格を象徴している。観光政策として町当局が行なっている数々の事業は、古い文化景観の上に新しい文化景観を積極的に積み重ねていることになる。

#### Ⅳ おわり——社会構造と文化景観変貌の要因

人口8300の草津町の町長は、過去6代にわたって、「八社会」から輩出している。「八社会」の構成メンバーは、大東館・大阪屋〔ホテル ヴィレージ〕・ホテル一井・ホテル高松・ナウリゾート〔奈良屋〕・旧ホワイトタウンの明治以来の老舗に、新参者の草津白根観光ホテル桜井と草津東急ホテルの大手である。旧ホワイトタウンとは、山田屋が高原に作った大規模リゾートホテルの名称であったが、1988年熊谷組系の草津高原開発リゾート株式会社に買収され、現況は更地となっている。八社会のオーナーはそれぞれはほとんどが町会議員となっている。大東館・ホテル東急・旧ホワイトタウンが前町長派、大阪屋・ホテルビレッジ・ホテル一井・ホテル源泉（現ホテル スパックス草津）が現町長派、奈良屋・ホテル桜井がキャスティングボードを握っているらしい。中沢派は12年間政権を維持し、中沢兄弟の母の実家はホテル一井で、一井の市川善三郎は4代前の町長であり、市川紘一郎が現町長である。前町長時代、リゾート法によってリゾートマンションブームとなったが、中沢派が山本前町長の高度制限20階改正案を廃案に追い込み、1992年9月14日の町議会でのリゾートマンション凍結宣言をさせることになり、1994年1月より中沢派の市川町長の政治的勝利となっている。

リゾートマンション建設も、このように、外来資本を阻止し、自分たち地元の人間は「湯守り」であり、ベルツ博士の夢を実現しようとする中沢派で代表される地元有力者の意向によって左右される。利潤追及が第一の外来資本に対しては、「歩み入る者にはやすらぎを」とはいかないようである。

クラシック草津の外側には、観光とは直接関係ない人々の生活がある。中心部の陽の当たる文化景観を支える一般住民がいる。女性を100とした男の比〔女性比〕は1950年以前は128～102と男の方が多かったが、以後100を割り、1995年は91で全国の96に比べて男性が少ない社会である。これは人口ピラミッドを見ると24～34才の若者層が少ないひょうたん型になっている（図7）。若者に魅力的な職場が少なく、高卒後他所で仕事につき、晩年草津へ帰る人が多い。青年人口の少なさと逆に、高齢者率は19.2%（1,590人）（1995年）と県（15.6%）・国（14.1%）に比べても非常に高く、明日の日

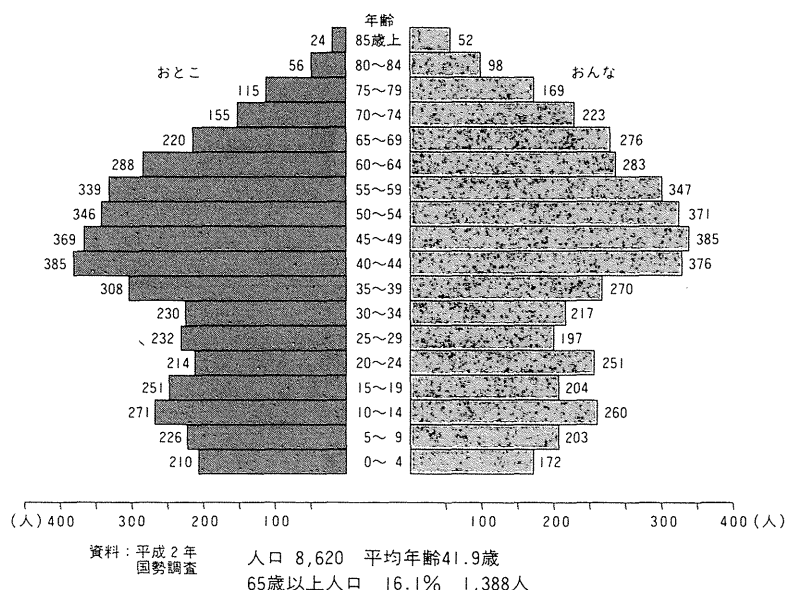


図7 草津町年令5歳別人口（1990）  
（草津町役場の資料による）

本の姿がすでに草津で実現している。65才以上人口の1割は独居老人で、その半分が町内に身寄りがない。

その一つの理由は、役場東方2.5km、六合村との境に国立療養所栗生楽泉園があり、382人（1997）のハンセン病（らい）患者がおり、その平均年齢は74才1ヵ月と高令であるためである。入所期間30年以上の人が9割を占め、外国人も20名いる。この園は1932年に作られ、73万 $\text{m}^2$ の敷地に271棟、延39万 $\text{m}^2$ の建物があり、307名の職員が働いている。これが設立される以前は湯の沢部落に、らい患者が集住しており、草津町のお荷物となっていた。

温泉観光地の特色として、人の出入りがはげしく、高令者率が高いのに若い労働力が少ない。そのため文化活動・スポーツ活動・消防団・商工会・PTA・婦人会なども老人主体のものになってしまい、低調である。しかし、公民館活動には少年教室として竹工作・ゲートボール・小運動会・町内文化財巡り、プラネタリウム見学・もちつきなどが行なわれ、共働き家庭が多く、日曜日でも両親と一緒に過ごすことのできない児童にとって、学校外教育の機能を担っている。婦人学級でも、講演会・施設見学・社交ダンスなどが行なわれ、細々とながら文化活動が続いている。

地域社会の構造をみた時、「華やかな観光事業活動」と「つましやかな住民活動」の表裏構造が認められる。入湯税2.4億円（1993）を含む43億の町の財政、民間の収入を含めると113億円といわれる大きな観光収入は、江戸時代から一貫して草津経済と文化景観形成の柱であった。

しかし、隔絶した盆地、火山斜面の平坦地と白根火山などの美しい自然景観、日本第2の湧出量を誇る温泉、高度経済成長による余暇の発生にともなうスキー・リゾートマンション・音楽祭、などは、明治11年（1878）ベルツ来草によるドイツ文化への開眼に負うところが大きい。市庁舎の屋根、湯畑



広場の民家、ベルツ通り、ロマンティッシュ シュトラーセの碑、リゾートマンションとホテルの名称にドイツ語の多いこと、などドイツ文化をほうふつとさせるものが多い。那須・諏訪・箱根・白浜・道後など似たような条件をもつ温泉地は他にありながら、ドイツ風、音楽までも内包した温泉地に発達したのは、自然のみならず、ベルツ・群馬交響楽団の存在と、それを開花させた中沢一族で代表される文化景観形成者としての人間集団のハーモニーによって、草津の文化景観が形成されてきた。

5 回の草津への野外調査参加者は次のとおりである。

比較文化学類（1985年10月24～27日）

教官：田林 明・加賀美雅弘、学生：東野直行・松本絵里・板坂秀哉・橘 健一・須山 聡・太田浩一朗・鈴木正師・小川雄二・石井久生・海老原久太郎・高橋浩史・岸 竜次・小林 寛・杉野智仁・秋丸直美・黒岩千恵・佐藤佳子・浦部浩之・大岩 至

地域研究科（1991年6月4～7日）

教官：中川 正、院生：青木義昌・王 敬華・片岡 樹・寒水明子・小坂伸顕・田中俊弘・田中真理・谷祐可子・福田美紀・楊 省現・吉原亜希

地域研究科（1992年10月26～30日）

教官：中川 正、院生：伊藤俊幸・植田麻美子・柿原国治・河村正雄・鬼頭健司・桜木さつき・清野弘一・田沢恵子・原田 令・藤倉安奈・森岡佳子

地域研究科（1994年5月31～6月4日）

教官：中川 正、院生：天野寛雅・佐藤俊也・大場 剛・佐々木てる・菅 陽子・久野和子・福田真理・菊川水際・矢島宏三・沢井亮生・カーキ・アリフ

地域研究科（1995年6月6～9日）

教官：中川 正、院生：上村ゆう美・小川直樹・翁 康治・田 野・山村 浩・吉田壮介・權正清美・小林啓倫・松本幸子・山崎真理子・藤原 文・毛 淑華・李 顕周

本報文をまとめるに当たり、文部省科研費基盤研究（B）（2）、「わが国における技術革新に伴う空間組織の変客に関する地理学的研究」（代表高橋伸夫）と総合研究（A）「日本農業の耕作方式と再生産過程に関する農村システム論的研究」（代表斎藤 功）の一部を使用させていただいた。草津町役場の山口喜好企画開発課長はじめ多くの関係者、およびヴィレッジ会長中沢晃三氏には非常にお世話になった。記して謝意を表したい。

## 使用文献

トク・ベルツ 菅沼竜太郎訳（1979）：『ベルツの日記』上、374頁、岩波書店。

トク・ベルツ 菅沼竜太郎訳（1979）：『ベルツの日記』下、429頁、岩波書店。

鹿島卯女（1972）：『ベルツ花 エルウィン フォンベルツ夫人の生涯』、鹿島出版会。

中沢温泉研究所（1975）：『温泉草津史料 第1巻』、草津町長 中沢 清（1976）：『草津温泉誌 第壹巻』、石橋長英（1978）：『現代に生きるベルツ』、日本新薬株式会社。

山村順次（1978）：草津温泉集落の再編成過程—特に高原都市開発に関連して、千葉大教育学部研究紀

- 要, 27-1, 191-215.
- 市川善三郎 (1980) : 『ベルツと草津温泉』. あさを社 (高崎市).
- 辻村 明 (1984) : 『地方の誇り』. 中公新書. 174頁.
- 佐々木 博 (1988) : 観光地山中湖村の地域形成. 筑波大学地域研究, **6**, 95-134.
- 草津町商工会 (1990) : 草津町・小売商業振興モデル商工会事業報告書. 185頁.
- 佐々木 博 (1990) : 房州白浜町の地域変容. 筑波大学地域研究, **8**, 1-42.
- 佐々木 博 (1992) : 「雪国」湯沢町のリゾートマンションの地理学的分析. 人文地理学研究, **16**, 163-181.
- 草津町長 山本 巖 (1992) : 『草津温泉誌 第貳巻』, 902頁, 草津町役場.

## Changes of Cultural Landscape in Kusatsu Spa in Gunma-ken, Japan

Hiroshi SASAKI

The town of Kusatsu is one of the most famous spas in Japan and is famous for its spa music "Kusatsubushi". The town is abundant in hot spring water from Shirane volcano (2160 m high), and the volume of hot spring water out of more than 100 springs (36,839 l/minute) in Kusatsu is the second biggest after Beppu in Oita-ken (80,000 l/minute). Hot spring water here is hot (49~95.5℃) and acid (pH 2.1). So it has been used for the cure of diseases as venereal disease, leprosy etc. In 1878, German doctor Dr. Edwin Bälz, one of the founder of Faculty of Medicine, University of Tokyo, visited Kusatsu, and admired the way of time bathing (*Jikan'yu*). He bought land to build here Kurort (resort area) of German style. The guests to Kusatsu were used to stay here for about 40 days to cure.

After the high pitched economic development in 1960s and 70s, the number of visitors in Kusatsu has been increasing (three million in 1994) and new landscapes have been built as big hotels, ski courses and lifts, pensions, villas, big resort mansions and a concert hall. The landscape of town has changed from traditional hot spring settlement in basin to the modern resort towns on the hill area. The traditional classic Kusatsu is renewed in old style. The mayor of the town has been elected from the six owner families of big hotels, which are located around Yubatake square beside the biggest hot spring in the basin.

Key Words: Dr. Bälz, resort mansion, common bath, Kusatsu International Summer Music Academy and Festival



写真1 草津盆地 (1991. 6)

盆地西端バーデンメモリアルリゾートマンションより東方を見たもの。古い草津温泉は盆地底にあり、中央やや左上の左右の端に切妻のあるドイツ風の建物（突出し櫓がある）が草津町役場と草津温泉バスターミナル。盆地周辺の高原に最も古い赤い屋根（左上）のヴィレージや左端に東急ホテルやリゾートマンションが進出している。

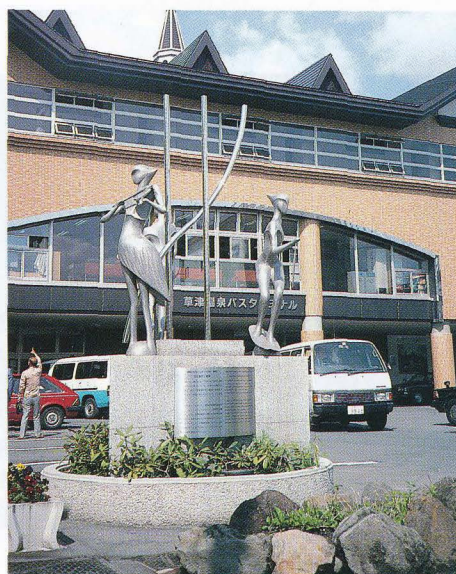


写真2 草津のシンボル3像 (1994. 6)

バイオリンをひく少女の後に、重なって見えないが湯揉み板を持つ人、右にスキーのストックを持つ若者。草津は温泉・スキー・音楽の町である。



写真3 高原のリゾートマンション (1994. 6)

写真1と同じ場所から北東を見たもの。右下は草津中学校、その左のカマボコ屋根は町営温水プール。その左の2個の円筒は温泉温水配湯所。





写真4 湯畑広場 (1994. 5)

光泉寺石段より北東を見たもので、正面に温泉の湧出する湯畑で、湯の花採取用の硫黄色の木箱が整然と7列並んでいる。左下の切妻瓦屋根は白旗の湯（共同浴場）で、源頼朝が入浴したと伝えられる。



写真5 湯畑 (1994. 5)

写真4と逆から見たもので、自噴泉が滝となって湯川へ流下している。左にドイツ風切妻木骨造りの土産物屋、右の火の見櫓風の瓦屋根は湯揉みショーの行われる熱の湯（共同浴場）。



写真6 クラシック草津 (1996. 5)

湯畑を背にして滝下通りの東方を見たもの。2階が突き出た“せがれ造り”が特徴。左下に千代の湯共同浴場の屋根が小さく見えており、松村屋の向う側の一本の樹木が閉鎖された鷺の湯の跡。



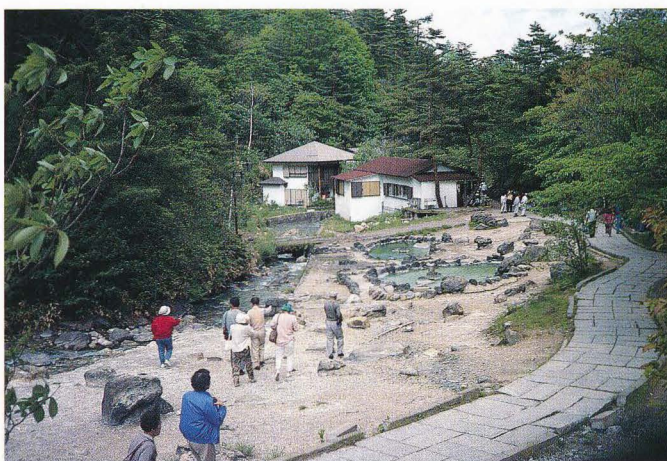


写真7 西の河原 (1992. 10)  
温泉が無数自噴している。左側の自噴泉に町営の露天風呂がある。

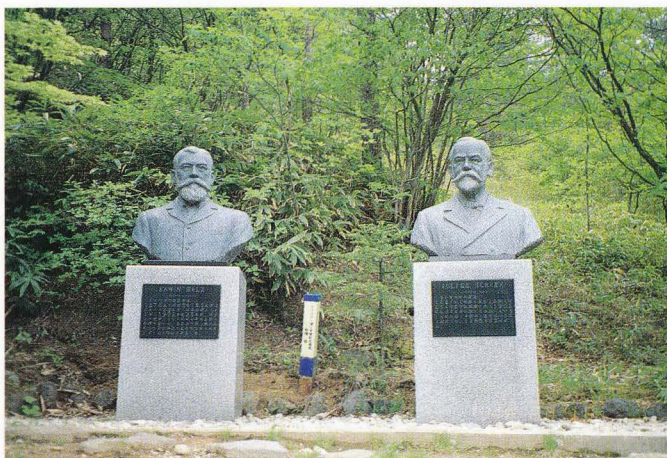


写真8 ベルツの碑 (写真左側) (1994. 6)  
西の河原公園南側斜面に1935年に建てられた。右側は外科のユリウス＝スクリバ(1848～1905)の像。

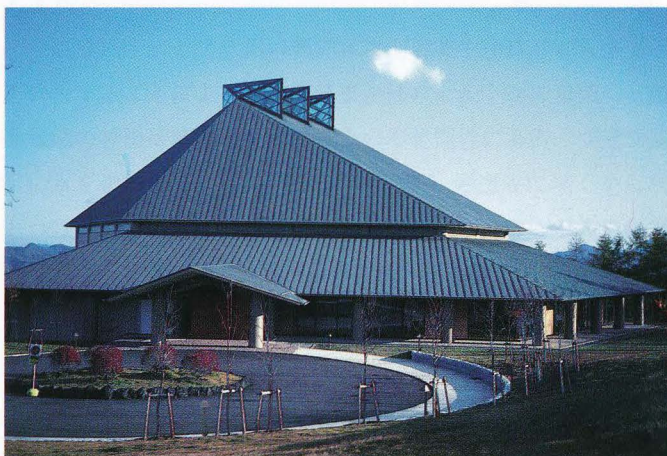


写真9 音楽の森コンサートホール (1995. 6)  
608席。六角型の建物は1991年に22億円をかけて完成した。